

[野生動物による造林木の新たな被害実態の解明に関する研究]

イノシシによる広葉樹被害とその対策

新井一司・奈良雅代*・中村健一

(緑化森林科) *現大島支庁

【要 約】植栽したイロハモミジ、ケヤキ、クヌギの引きちぎられたような甚大な被害は、イノシシによるものである。このイノシシ被害は、急斜面版シカ侵入防止柵で対策できる。また、イノシシは、他に弾性ポールも噛み切る。

【目 的】

日の出試験林(日の出町平井)において、植栽したイロハモミジ、ケヤキ、クヌギの上部が欠落するという甚大な被害が発生した(図1)。被害木の切断面は、樹皮の一部が残存し、横方向に引きちぎられたような特徴がある。この加害獣を特定し、対策を行うとともに、同様の被害が都内で発生しているかを明らかにする。

【方 法】

2013年11月5日に被害報告があった広葉樹植栽地において、加害獣ならびにその加害状況を把握するためにセンサーカメラ(HC500, Reconyx)を2013年11月20日に設置した。被害対策として2014年6月に農総研で開発した急斜面版シカ侵入防止柵(新井, 2008)を被害林地の外周に設置した。その後、被害の有無を確認するとともに、センサーカメラを設置し、野生動物の行動を撮影した。また、多摩地域において類似の被害が生じているかを把握するために、2014年から2018年にかけて再造林地を踏査するとともに、8林地にセンサーカメラを設置した(図2)。

【成果の概要】

1. センサーカメラには、2013年12月12日、イノシシが、下刈り時に広葉樹の誤伐防止用として幹に結わえてあったピンク色の標識テープを口に咥え何度か引いた後、幹に噛み変え、一気に引きちぎる様子が撮影されていた(図3)。その後、イノシシは、この引きちぎった幹や葉を摂食することはなかった。なお、急斜面版シカ侵入防止柵で囲んだ被害地(図4)は柵の外部で多数のイノシシが撮影されたが、イノシシによる柵内の侵入や物理的な柵の損傷はなく、2018年12月まで植栽木の被害も確認されなかった。このことから、継続して防除されていると考える。
2. 同様のイノシシによると断定できた植栽木被害は多摩地域で確認されなかった。しかし、誤伐と推定した広葉樹の中には、今回のイノシシによる引きちぎり被害が含まれている可能性もある。センサーカメラに撮影されたイノシシによる類似の引きちぎりは、2017年11月3日、檜原村の再造林地において目印として挿してあった直径4.3mmの弾性ポールの被害1件のみ(図5, 6)で、18秒以内に噛み切られており、イノシシが噛み切る力は極めて強いと考える。

【残された課題・成果の活用・留意点】

これまでイノシシによる林業被害は、植栽木の根元付近、地表部の掘り返し程度であった。今後もイノシシによる林業被害事例を収集し、パンフレットにとりまとめる。



図1 クヌギ苗木の被害

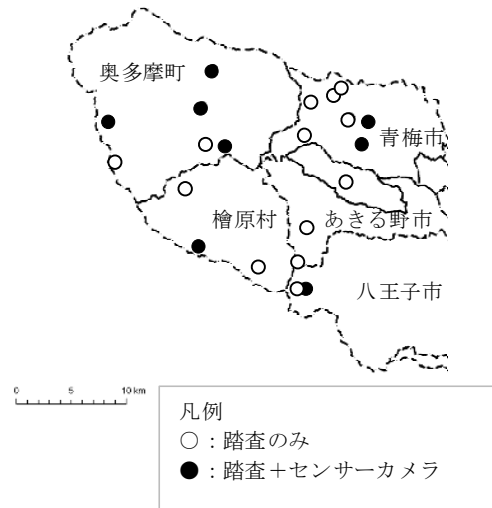


図2 踏査地点とセンサーカメラ配置図



図3 イノシシによる苗木の噛み切り



図4 急斜面版シカ侵入防止柵による対策



図5 イノシシによる弾性ポールの噛み切り

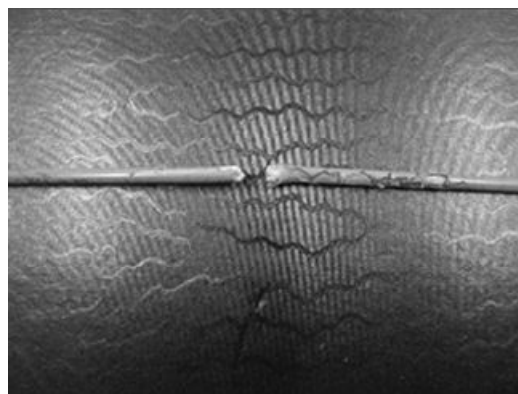


図6 噛み切られた弾性ポールの切断面